宮崎医科大学病院の処方せんおよび注射せんからみた
抗生剤使用状況調査*¹ (1) 処方件数

鶴岡道雄, 橋本 強, 児玉裕文, 上野 幸,
栗屋尚子, 郡 裕子, 安田孝一
宮崎医科大学医学部附属病院薬剤部*²

Situation of Antibiotic Use at Miyazaki Medical College
Hospital*¹ (1) Observation on Number of Prescriptions

MICHIO TSURUOKA, TSUYOSHI HASHIMOTO, HIROFUMI KODAMA,
OSAMU UENO, SHOKO KURIYA, YUKO KORI and KOICHI YASUDA
Department of Pharmacy, Miyazaki Medical College Hospital*²

(Received June 10, 1982)

Recently there has been remarkable increase in the amount of antibiotics used for various infections. Various problems concerning drug-resistance or *microbisme selectionné et substitué* were studied in terms of frequency of use or combination of the antibiotics. The following results were obtained from the prescriptions written during June 1 to 30 of 1978, 1979 and 1980 at Miyazaki Medical College Hospital: 1) The ratio of antibiotic prescriptions to the total prescriptions was approximately 20~24%. 2) The descending order of the frequency of use by group of antibiotics was: cephalosporins, penicillins, aminoglycosides, tetracyclines, macrolides, others. The same tendency was seen in each of the three years. 3) Aminoglycosides were the most frequently combined antibiotics. 4) Among the departments, the department of surgery recorded the largest number of antibiotics (single and combined use), while the internal medicine had the largest number of prescriptions written.

Keywords—antibiotic prescription; frequency; combination; cephalosporins; penicillins; aminoglycosides.

近年,ますます抗生剤の開発が進み,また種々の細菌感染症治療に対して用いられる各種抗生剤の使用量が増加している。^{1,2)}

抗生剤使用量の実態を調査し,その使用傾向を把握していくことは,起炎菌の変化,耐性菌の出現,耐性伝達といった抗生剤療法に関する諸問題を考慮するために重要なものであり,今回,当院における抗生剤使用状況調査を行ったので報告する。

調 査 方 法

調査対象に1978~1980年の各年6月,1カ月間において発行された外来・入院のすべての処方せんおよび注射せんを用い,当該月間の総処方件数,抗生剤処方発行件数,併用件数について調査し,抗生剤処方比,使用頻度,併用比および診療科別における特徴について比較検討した。なお,外用抗生剤は対象から除外した。

当該月間に6月を選んだことについては,年間の季節的要因を少しでも排除したいと配慮したものである。当院は,1978年にはベッド数350床,1980年より600床と増床され,1979年にはICUと歯科口腔外科も開設された。

調 査 結 果

1. 抗生剤処方比率

*¹ 第48回九州山口薬学大会(宮崎,1981年10月)で発表。

*² 宮崎郡清武町大字木原5200;Oaza Kiwara 5200, Kiyotake-cho, Miyazaki-gun, Miyazaki, 889-16 Japan

各年6月の総処方件数に対する抗生剤処方発行件数より抗生剤処方比を表1に示した。当院では、1978～1980年において約20～24%の割合で抗生剤が処方されていた。

表1. 総処方件数に対する抗生剤処方比

	1978 JUN.	1979 JUN.	1980 JUN.
総処方件数	7,503	11,026	12,483
抗生剤処方件数	1,512	2,644	2,805
抗生剤処方比	20.15 %	23.98 %	22.47 %

2. 抗生剤別による使用頻度

各年6月の抗生剤処方発行件数より抗生剤別の使用頻度を図1に示した。

図に示すとおり、セファロスポリン系抗生剤の使用頻

度が他に比べ最も高く、各年とも約45～50%を示した。ペリシリン系は約27～30%、アミノグリコシド系は約13～17%を示した。以下、テトラサイクリン系では約3～5%、マクロライド系では約1～3%、その他（リンコマイシン系、抗真菌抗生剤等を含む）約2～5%となり、各年ともに同様な傾向がみられた。

3. 抗生剤別による併用の比率

各年6月の併用件数より各抗生剤の併用の割合を図2に示した。図に示すとおり併用の最も多かった抗生剤はアミノグリコシド系抗生剤であり、併用件数の約37～46%を占めた。また、セファロスポリン系抗生剤では約27～40%を占めた。以下、ペニシリン系、テトラサイクリン系の順となった。クロラムフェニコール系抗生剤については併用はほとんどみられなかった。

図1. 各年6月における各抗生剤の使用頻度

図2. 各年6月における各抗生剤の併用比

図3. 各年6月における各科別の処方発行件数, 抗生剤処方件数, 併用件数および総計

4. 診療科別による処方発行件数、抗生剤処方発行件数、併用件数の比較

各年6月の処方発行件数、抗生剤処方発行件数、併用件数を当該月間および診療科別に比較して図3に示した。白抜き、斜線および黒を合わせた棒グラフは、処方発行件数、斜線と黒を合わせたのは抗生剤処方発行件数、黒は抗生剤併用件数をそれぞれ表わす。また、その他の診療科には精神、産婦、歯科口腔、放射線、麻酔、中央手術部の各科を含む。

各年6月の処方発行件数は内科が最も多く、総処方件数の約24~26%を占めていた。外科では約15~16%、皮膚科では約10%を占め、これらの3つの診療科で約50%を占めた。

抗生剤処方発行件数についてみると外科が特に多いことがわかった。さらに抗生剤が処方される頻度についてみると、ICUでは処方発行件数が他科に比べ少ないが約67~98%と多くを占めていた。他科についてみると泌尿器科では約56~65%、外科では約31~45%、耳鼻咽喉科では約27~48%、小児科では約19~34%、処方発行件数の最も多かった内科では約10~12%であった。

抗生剤の併用件数は、各年349件、374件、494件であり、抗生剤処方発行件数1,512件、2,644件、2,805件に対して占める割合は、23.08%、14.15%、17.61%と約14~23%を占めていた。

各診療科についてみると特に併用の多かった外科では各年の抗生剤処方発行件数397件、784件、582件に対し併用件数は、176件、250件、170件と各々44.3%、31.9%、29.2%を占めており、内科では占める割合が約5.3~15.9%と外科に比べ併用は少なかった。他科では泌尿器科約10.1~22.1%、耳鼻科10.4~21.8%、皮膚科約4.8~20.6%、脳外科約2.7~62.1%、抗生剤処方頻度が最も多かったICUでは約44.2~57.9%を占めていた。

総 括

いくつかの施設^{9,10)}において抗生剤の使用状況調査が行われ報告されている。今回、当薬剤部でも抗生剤の使

用状況を総処方件数、抗生剤処方発行件数、併用件数について調査した。

処方発行件数についてみると診療科では、内科が最も多く、総処方件数に対して約24~26%を占め、外科に比べて多かった。次に、抗生剤処方発行件数から抗生剤別の使用頻度をみると、セファロスポリン系抗生剤およびペニシリン系抗生剤が著しく多く、以下アミノグリコシド系、テトラサイクリン系、マクロライド系の順となり各年とも同様な傾向を示した。当院における抗生剤処方比は総処方件数に対して約20~24%を占めており、抗生剤処方発行件数が最も多かったのは外科であった。また、診療科別の頻度についてみるとICUでは約67~98%と術後感染の処置を有するという点で特に多く、外科では約31~45%と内科と比べても抗生剤が処方される割合が多いということがわかった。

抗生剤併用件数についてみると、抗生剤処方発行件数に対する併用件数の割合は約14~23%を占めていた。抗生剤別では最も多い併用剤はアミノグリコシド系抗生剤であった。また、クロラムフェニコール系抗生剤に関しては併用はほとんどみられなかった。診療科別にみると外科で最も併用件数が多く、また、抗生剤の処方される割合が高いICUについては併用される割合も高かった。一方、内科では外科に比べ併用される割合が低かった。

一施設の限定した期間における調査ではあるが、抗生剤の使用傾向を抗生剤別あるいは診療科別に明らかにできた。今後、量的な比較も必要と思われるので検討していきたい。

文 献

- 1) 藤井良知：臨床と研究，56(6)，1829 (1979)。
- 2) 藤井良知：月刊薬事，18 (12)，2165 (1976)。
- 3) 蔵井良知，山岡桂子：Jap. J. Antibiotics XXX II，675 (1979)。
- 4) 斎藤 厚，重野芳輝，中富昌夫，広田正毅，那須勝，原 耕平，清水龍夫：Chemotherapy，28，1201 (1980)。